黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.70 (December 12, 2009)

第70号　2009年12月12日

例会発表要旨

7月例会　2009年7月11日　神戸市外国語大学

オバマ大統領演説紹介――カイロ演説（カイロ大学、2009年6月4日）

黒人研究の会・第55回全国大会は、6月27日―28日にキャンパスプラザ京都で＜アメリカ新大統領誕生の背景と意義を考える＞をテーマとして開催された。本例会の趣旨はその大会テーマを引き継ぎ、今後も議論を継続的に発展させていこうとするものであった。全国大会では、バラク・フセイン・オバマの大統領選挙活動から大統領就任（2009年1月）、その後の動きまでを、基調講演や特別発表、自由討論などを通して皆で議論した。研究会事務局からは、話題提供としてオバマの大統領勝利演説および大統領就任演説の映像をDVDで紹介し、演説原稿を資料として配布した。そうした大会での経緯を踏まえ、本例会では事務局長・古川哲史が、オバマ大統領の話題になった演説のいくつかに短く言及し、6月にエジプトのカイロ大学でおこなった演説 “A New Beginning” 「新たな始まり」の全文（公式英語文および日本語訳）を紹介した。そしてその内容や影響を例会参加者で論じた。

（文責・古川　哲史）

９月例会　２００９年９月２６日　大阪工業大学

インデペンデント映画の挑戦：ShadowsとIllusionsによる「悲劇のムラータ」の書き換えについて

柴﨑　小百合

「悲劇のムラータ」は、1940年代終わりから1960年代初頭のハリウッド映画で多く描かれた。「悲劇のムラータ」は、若く、美しく、神秘的で、ときには官能的で、男性をひきつける魅力に溢れた女性であり、多くの場合、その薄い肌の色を利用して白人になりすまし、白人男性と結婚することを望む。しかし、たいていは、映画の終盤で出自が露見し、「ムラータ」は男に捨てられたり、酒に溺れ身を滅ぼしたりする。これは、パッシングをしたことへの戒めであり、映画は人種的に曖昧な「ムラータ」を黒人として再び位置づけ直して終わる。本発表では、インデペンデント映画の領域でみられた、このようなステレオタイプに抵抗するような表象に注目した。「インデペンデント映画の父」とよばれるジョン・カサヴェテス監督の1959年の実験映画Shadows（邦題：『アメリカの影』）では、アメリカ主流文化が容認し得ないような、人種的に曖昧で、重層的なアイデンティティを持つ主体的な「混血」が描かれていることを論じた。さらに、黒人女性映画監督の先駆者的存在であるジュリー・ダッシュによる1983年のショートフィルムIllusionsでは、これまでのハリウッドの人種に関する伝統や慣習が撹乱され、パッシングが白人至上主義を転覆させる戦略的な手段として読み替られていることなどを分析した。1990年代になると、現代の視点から読み直された「ムラータ」が再びスクリーンを賑すようになるが、ShadowsとIllusionsはそれらと比べてももっとも前衛的で刺激的な作品である。

裏切りのきずな—Toni Morrison, A Mercyにおける愛の構図

鵜殿　えりか

Toni Morrisonの最新作A Mercy (2008)の舞台は17世紀後半のアメリカである。誰もが何らかの隷属状態にあったこの時代から、どのようにして残酷極まりない黒人奴隷制へと移行していったのか。モリソンは「人種」以前の「奴隷制」の時代を描き出すことによって、この問題に鋭く切り込もうとしている。本論では、この小説において、人種・階級・性の差別的制度が作り出す状況が、いかに複雑に絡み合いながら女たちの関係を歪めていくか、それを乗りこえて女たちがどのようにして互いの絆を見いだそうとするかをたどった。

農園主Jacobを中心とした妻と使用人/奴隷の女たちの関係を分析し、初期アメリカの時代の家父長制、奴隷制がいかに女たちにとって裏切りの装置となっているかを検証した。この差別的制度によってもっとも引き裂かれる女奴隷Florensは、母親が弟を選び自分を捨てたことから来るトラウマに苦しんでいる。母親は自分にできる最良のことを娘に施したのだが、その慈愛の行為の意味は娘に伝わらない。フロレンスが愛する鍛冶職人を傷つけ狂気に至るのも、この母に起因するトラウマが原因である。

しかし、物語の中で唯一このような理不尽な制度に抵抗する女性がDaughter Janeである。魔女裁判の嵐吹き荒れるニューイングランドで、自ら魔女と見なされ拷問を受けながらも、ジェインは命がけでフロレンスを助ける。このジェインの行為は、制度に絡めとられて身動きができず互いに傷つけ合う女たちの現状の中にあって、未来を切り開くふるまいである。黎明期の奴隷制、家父長制、植民地主義、宗教的不寛容が描きだされるこの小説では、それらに支配され分断される女たち、それらに抵抗する女たちの失敗と数少ない成功が、また、裏切りが構造化された社会を乗り超えようとする弱者存在の意志が描かれていると論じた。

１０月例会　２００９年１０月２４日　キャンパスプラザ京都

マルコムXとゲットー

大上　茉莉

マルコムXの言動は、宗教団体NOI（Nation of Islam）の脱退前はNOIというイデオロギー的制限内にあり、その点では、マルコムXの真の主張はNOI脱退後に出てきたと言える。しかし、マルコムXの思想や活動には、NOIに属していた時代、NOI脱退後どちらにも、黒人居住区ゲットーの下層階級の黒人のために行動したという点もまた見られる。この点においては、NOI脱退後はもちろん、NOI時代のマルコムXの行動を見ることや、NOIに入る前のゲットーでの生活を見ることもまた、マルコムXの思想形成の材料として重要となるのではないかと考えられる。具体的には、青少年時代はハスラーとしてゲットーで生活し、それは後の思想形成の重要な要素となったこと。NOI時代には、NOIを黒人救済の手段と考えて懸命に活動する一方、途中からはNOIの教義を超えて大衆のために必要なことを考えていた面もあること。NOI脱退後は特にOAAU（Organization of Afro-American Unity）により、ゲットー改善のための具体策を提示したこと。修士論文

ではこの三点を中心に、マルコムXの思想や行動をゲットーという要素に注目して論じていく予定である。

農村と都市の間で ― ジンバブウェはどこへ向かうのか

平尾　吉直

2000年の白人大農場主からの土地強制収用以来、政治的・経済的混乱が続くジンバブウェ。2005年、北朝鮮やイラクなどとともにジンバブウェを「圧制の前哨」と非難した当時の米国務長官コンドリーサ・ライスのような立場を支持することはできない。かといって、混乱の責任が独立以来大統領の職を守ってきたムガベと与党ZANU=PFにあることもまた否定できない。ジンバブウェの問題を解決困難にしている要因のひとつは、農村と都市の齟齬である。ジンバブウェでは農村と都市が互いに深く結びつきながらも、違う方向を向かざるをえない。ムガベ／ZANU=PFの政策自体、農村と都市の間を揺れ動いてきた。地道な農村開発を行っていた80年代から一転、構造調整計画によって経済が自由化された90年代は、大きくなったパイをめぐってウィロウゲイト事件に代表される汚職が横行する都市ブルジョワの時代だった。その結果、都市ではバブルに取り残された人びとが、民主化を求めて野党MDCに結集した。一方、農村では土地問題の解決の遅れに不満を募らせた人々が、土地占拠という形の「民主化運動」を起こす。同じ「民主化」を求める動きでも、都市と農村では全く違う形を取ったのである。そして2000年、農村の動きを追認する形で政府による土地強制収用が行われる。ジンバブウェ政府は再び、農村の側に大きく舵を切った。とはいえ、収用された土地は貧しい農民の手に渡ったわけではない。ほとんどが政府の関係者に分配され、多くの不在地主が生まれた。2008年の大統領選を経て生まれたZANU=PFとMDCの連立政権は、国の分裂を修復するために最善の選択だったのかもしれない。さまざまな不安定要素はあるものの、ジンバブウェの状況は良い方向に向かっているように見える。（発表後、MDCが連立政権からの離脱を発表したことを知った。ジンバブウェはどこへ向かうのか、今後も目が離せない）

会員からの投稿

The Audacity of Hope に見るObama

須田　稔

M.L.King,Jr. が「絶望の山から希望の石を切り出す」と夢実現の決意を語ったことを記憶していたかどうかはともかく、Barack Obamaは「希望の大胆不敵さ＝向こう見ずな希望」に生きようとの決意をいまも堅持するのだろうか。

本書で彼が８～１０回言及するアメリカの政治指導者は、T. ジェファーソン、A.リンカン、F. D. ロウズヴェルト、J. F. ケネディ, D. レーガン。公民権運動の忘れえぬ人、M. L. キング牧師とローザ・パークスは各４回の言及。60年代公民権運動を生きてこなかったし、政治家として生きているのだから、この比率は納得できる。

単なる変化でなく変革を志向するリベラルな闘士だという見方は、4月のプラハでの「核のない世界を」演説で頂点に達した感があった。10月のノーベル平和賞受賞で、その見方の熱の入りようは最高潮になるかと思いきや、逆に不評の比率が急上昇と伝えられる。実績の評価ではなくて、期待可能性への褒賞とはと、ノーベル平和賞の授与対象の選考基準にも疑問が出される始末だ。

核兵器のない世界を目指す決意が、核兵器保有大国で唯一の核使用国アメリカの大統領の口から語られたのは、史上初のアフリカ系アメリカ人大統領出現と同じくらい驚天動地の画期的“福音”ではあった。しかし、年末から年始にかけてのイスラエルのガザ襲撃には大統領就任後も沈黙を守り、アフガニスタンとパキスタン内の反政府武装勢力殲滅に名を借りた無辜の市民への殺傷・破壊活動を推進する最高責任者が「平和賞」の栄誉に値しないのは明白なのだ。

日本人も汚辱にまみれたノーベル平和賞を記憶している。1968年1月27日に「非核三原則」を発表、71年6月17日「沖縄返還協定調印」というのが評価されたらしくて、佐藤栄作氏が1974年に受賞した。アメリカとの密約があって「三原則」の欺瞞が明瞭になりつつあるし、あの６７都市で50万人以上を死亡させた「夜間無差別焼夷弾空爆」の司令官カーティス・ルメイ将軍に、1964年12月4日、佐藤栄作内閣は勲一等旭日大綬章を贈ったのだ。航空自衛隊の育成に功績があったという理由なのだ。

本書の中にある記述。例えば、「戦争は地獄かもしれないが正しい行為かもしれない。War might be hell and still the right thing to do」とある。「正しい」とは政治的に？道徳的に？その両方で？　オバマは「平和主義者」ではないのだ。「わたしは全ての戦争に反対なのではない・・・支持できないのは、愚かなdull戦争、軽はずみなrash 戦争、理性でなく情熱に、原理でなく政治に根ざした戦争」。そして彼はイラク開戦に反対した。「イラクとの戦争が首尾よく運んだとしても、そのあとアメリカ合衆国は占領しなければなりません。いつまでかかり、どれだけの費用が必要で、どういう結果になるか不明な占領がです。明白な理論的根拠もなく国際的な強い支持もないままイラクに侵攻すれば、中東の火を煽り、アラブ世界の最悪の衝動を煽り、アルカイダが新兵を獲得する力を強めるだけになるのです」とシカゴで2000人に語ったのだ。

イラクからの撤退方針を明らかにしているオバマだが、アフガニスタンに増派と言う。「支持できない戦争」ではないのか。09年10月26日付『毎日』4面の「From」で、斎藤信宏記者は「一見、理想主義者に見えるが、極めてシビアな現実主義者の顔を持つ」と述べ、「得意の演説で、ここまでのところ世界に対して米国の現実を覆い隠す事にある程度は成功している」と書く。彼の「CHANGE」を「変革」と解した人が日本で少なくない。ぼくは反駁してきたのだが。

もう一つ、1960年代をどのように評価するか、という点で、彼の次の一文はそっくり肯定できるかどうか。「60年代がもたらした数々の勝利、つまり、マイノリティーズと女性に完全な市民権を認め、個人としての自由を強め、権威を問う健全な意志を強めたことで、アメリカを全ての市民に遙かに住みよい場所にした。しかし、その過程で、失われてしまい、だから取り戻さなければならぬものがある。アメリカ人としての一体性を育ててきたとみんなが思いこんできた、あの良質の信頼感と同胞感情だ」。

2004年の民主党全国大会で彼が行った基調演説の一節「黒人のアメリカも白人の、ラテン系の、アジア人のアメリカもない。アメリカ合衆国があるだけなのだ」には、「わたしたちは肌の色ではなく、内なる人格によって判断される」、というキング牧師の未来の展望を実現させたアメリカが凝縮されている」と書いている。

『恐怖と欠乏のない世界で平和の内に生きる』、この権利を擁護するなら、核兵器の廃絶と戦争の放棄を急ぐオバマであるべきなのだ。人民の「希望」を実現するには決断の「大胆さ」こそ。

（立命館大学名誉教授）

海外学会報告

溝口　昭子

2009年9月9-12日に英国Lancaster大学で開催された学会Glocal Imaginariesに参加した。この学会は大規模な研究プロジェクトMoving Manchesterの一環として企画されたものであり、120人以上の参加者（日本からは5人）があった。Moving Manchester自体が、1960年から北西イングランドのManchester郡(Lancasterを含むGreater Manchester)において、移民体験や文化がこの地域の文化や作家の創作活動を特徴づけてきたプロセスについての研究であるので、学会での発表内容も、「グローカル」「移動」といった中心コンセプトを共通項に、「秋葉原殺人事件」から「ボリウッド映画のドイツにおける受容」までと、極めて多彩かつ学際的であった。約10セッションが常に同時並行で行われたため、全体の発表

の１割しか聞けなかったが、聞いた中で「黒人研究の会」の領域に関連すると思われるものについて、報告させていただく。（詳細は末尾のURLを参照）

発表者はテーマごとにstreamに別れ、私はBlack Atlantic streamの第１グループCaribbean Journeysに属し、Caryl Phillipsの最初の戯曲Strange Fruitにおける移動と「故郷」の関係について発表を行った。同じグループではFiona Darroch氏による“The Sea is History: Sacred Imaginaries in Caribbean Writing”（David DabydeenやWilson Harrisを扱う）、およびOle Birk Laursen氏による“Time, Memory and Place in Andrea Levy's Fiction”が発表された。Laursen氏の発表で興味深かったのは、Caryl Phillipsと同年代であるカリブ系移民第2世代作家Andrea Levyが、PhillipsがStrange Fruit (1980)で扱ったテーマ（カリブ系移民第１世代が「祖国英国」での強烈な差別体験のトラウマを第2世代に語らないことで、第2世代がより深刻なidentityの危機を経験する）を、約20年も経ってFruit of the Lemon (1999)で扱っているということだった。Laursen氏によれば、それはLevyの執筆時期の遅さだけなく、男性作家よりempowerされにくい女性作家の台頭の遅れというジェンダーの問題ということだった。

Black Atlantic streamの第2グループLegacies of Slavery and Transatlantic Culturesは、非言語系芸術、他者、奴隷貿易に的をしぼった発表であった。特にAlan Rice氏による“Slavery, Diaspora, Modernity and Glocalised Imaginations: Contemporary African Atlantic Artists Respond to the 2007 Bicentenary Commemorations”と、一橋大学の中井亜佐子氏の“Autobiography of the Other: From Slave Narratives to A Harlot's Progress”が目を引いた。Rice氏の発表では、英国の奴隷貿易廃止を記念する200年祭に際して、Manchesterでの関連展示に直接関わった氏が、作品の写真を実際に提示して、現代ブラックアーティストたちが自らのglocaliseされたidentityを奴隷貿易と関連させて「交渉」するその過程を論じた。 中井氏は、David DabydeenのA Harlot's Progress (1999)を「他者の自伝」（氏の英語圏文学に関する著書『他者の自伝』参照）の中の「メタ自伝」として、そしてHogarthの絵画のparodyおよびEquanoのslave narrativeの「不可能かつalternativeなversion」として論じていた。

他では、Discourses of the Glocal streamの第４グループThe Glocal Literary Market Placeにおいて、Gail Low氏（要旨未公開）が“Authorship and the Business of Postcolonial Writing”において、ナイジェリア人作家Amos TutuolaのPalm Wine Drinkard (1952)について、出版前に英国の編集者がその英語をいかに「修正した」かを、詳細なアーカイヴ調査に基づいて論じていた。Tutuolaのテクストに編集者の「修正」がかなり入っていることは有名な話だが、驚いたのは、Low氏によれば、編集者は、Tutuolaのナイジェリア英語を「標準英語」に直したというよりも、彼の「一貫性のないナイジェリア英語」を、編集者が考えるところの「一貫性があるピジン英語」に直していたということだった。出版当時、西洋の批評家が

もてはやした彼の「独特なアフリカ的英語」もまた、当時の「アフリカ英語文学」を消費する英語圏のマーケット向けに「作られたピジン」だったということだろうか。

また、Glocal Cities streamの第2グループTravel/History/Memorialsでは、Chris Wasike氏の“Discourse of Masculinity and Desires of Glocal Urban Imaginaries in Kenyan Hip Hop”を興味深く聞いた。発表ではケニアのヒップポップGengeのアーティストJua Cali（芸名Caliは彼が住んでいたNairobiのCalifornia地区（！）から来ている)のスワヒリ語歌詞を例に、ケニアの都市やそこでの男性性が、グローバリゼーション（internetを通じて今やケニアでも画像や動画がダウンロードできるMichael Jacksonの“Bad”(1987)の影響も言及されていた）の中で、どのように再想像／創造されているかが論じられていた。発表への質問（ケニアの女性ヒップホップについての質問や、Fanonを用いた分析の可能性）も刺激的であり、この分野への関心の高さがうかがえた。日本でも2008年11月に「POP AFRICA」というアフリカのポップカルチャーに関する学会が初めて開催されており、アフリカ研究における都市文化研究の発展ぶりをあらためて感じた。（また、黒人研究とは直接関係ないが、多民族・多文化社会を反映した各国の教育実践についての発表からは、教育に携わる者として学ぶところが多かった。）

この学会では、Glocal Imaginariesという名にふさわしく、受付で参加者は世界地図に「出身地」と「現在の居住地」を異なる色のシールで貼るように指示された。完成した「鮮やかな点が散在する世界」が、研究者自身が越境や移動を繰り返し、ネットワークを構築する時代になったことを示していた。例えば、我々５人の日本人が日本に留まっているのとは対照的に、シンガポール出身のLow氏は現在英国のDundee大学で教えており、南アのWitwatersrand大学所属のWasike氏も実はケニア出身であるといった具合に。今回、私は専門のアフリカ文学から「越境して」ブラックブリティッシュ文学について発表（そして久々の海外学会発表—あまりに久しぶりだったのでLeeds大学留学中にお世話になったShirley Chew名誉教授に連絡するのを怠り、学会に現れたご本人にお叱りをうけた）を行ったわけだが、Black Atlantic の発表者のテーマには共通点が多かったので、大いに勉強になり、結果的には現在の研究テーマである南ア文学における黒い大西洋への考察も深まり、意義深い学会であった。最後に、在外研究でLeedsにいらした加藤恒彦先生には学会直前に大変お世話になったこと、この場を借りて御礼申し上げたい。

Glocal Imaginaries学会URL:

http://www.lancs.ac.uk/fass/projects/movingmanchester/conference.htm

全発表の要旨:

http://74.125.153.132/search?q=cache:R36tOm2vCBQJ:www.lancs.ac.uk/fass/projects/movingmanchester/glocal_imaginaries/abstracts/Black%2520Atlantic%2520abstracts.doc+glocal+imaginaries+Akiko+Mizoguchi&cd=1&hl=ja&ct=clnk&gl=jp

（東京女子大学准教授）

新 入 会 員

Konrad Bayer 氏

I teach English at various universities in Kansai. I have a background, however, in music.
I studied orchestral performance at McGill University in Montreal, where I graduated with a Bachelor of Music degree. I completed a Master of Arts degree in Humanities a few years ago through California State University in Dominguez Hills. My MA thesis was on the evolution of protest, resistance, and social commentary in African American music. I continue to do research in popular music.
I have played in a number of bands in Kansai. My current band is a hard rock group called ザ・ブラック. We play a couple times a month. We have a recorded 4 songs so far. Our next performances are Friday, September 11th starting at 8:40pm at jaz' room nu things and Sunday, September 20th at AtlantiQs as part of the Kansai Music Conference showcase.
http://www.youtube.com/theblackjapan
http://www.myspace.com/theblackjapan

古賀　哲男　氏
所属：大阪市立大学文学研究科（准教授）
自己紹介：この度、遅ればせながら（というのも以前から半ば羨望と畏怖の念をもって当会の存在を知っておりましたので）入会させていただきます。目下、ラングストン・ヒューズをはじめとする黒人詩に関心があります。どうかよろしくお願いします。簡単ですが以上で自己紹介とさせていただきます。

会　員　消　息

編集後記

「音楽でアメリカを変えた人々の物語」と副題（邦題）のつけられた『キャデラック・レコード』という映画が9月に日本公開されていたので観に行きました。1950年代から70年代のシカゴに存在したレコード会社、チェス・レコードを舞台とし、ポーランド移民の社長レナード・チェスを中心に、マディ・ウォーターズ、リトル・ウォルター、ハウリン・ウルフ、エタ・ジェイムズなど黒人ブルース・アーティストの生き様を描いた作品です。ブラック・ミュージックをアメリカのポピュラー・ミュージックのメインストリームに乗せたチェスを慕いながら、賃金や契約を巡って白人によって搾取されているという側面を無視できないアーティストたちの心情が描かれており、興味深い内容でした。「音楽でアメリカを変えた」という副題は、オバマ大統領の「CHANGE」にちなんでつけられたのでしょうが、そのオバマ大統領のノーベル平和賞受賞は議論を呼び、変革の方向性がより厳しい世論にさらされています。会員諸氏の幅広い議論が本紙上でも展開されればと思います。

（時里　祐子）

＜編集＞　黒人研究の会・編集部
〒603−8143　京都市北区小山上総町
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

＜編集者＞　時里祐子